

# 梅若万三郎家所蔵写真乾板のデジタル化について(二)

Digitalized Images of Photographic Plates Owned by the Manzaburo Umewaka's Family (2)

梶山女学園大学文化情報学部教授

飯塚 恵理人

Erito Iizuka

## はじめに

筆者は一昨年より能楽シテ方梅若万三郎師の許可を頂いて、明治30年代に撮影された梅若万三郎家所蔵の写真乾板をデジタル化させて頂いている。これらは初世梅若実・初世万三郎・二世実を中心とした当時の梅若家の劇団としての充実を伝える貴重な資料である。昨年度デジタル化させて頂いた写真については拙稿「梅若万三郎家所蔵写真乾板のデジタル化について」(注1)に報告した。また、今年度デジタル化させて頂いた写真についてもその一部はすでに報告している(注2)。本稿はその続編にあたり、本年度デジタル化させて頂いた写真乾板について報告する。なお以下、梅若実・初世万三郎・二世実の人称については前稿(注1)を踏襲し、初世梅若実を「初世実」、初世万三郎を「万三郎」、明治30年代後半時の梅若六郎を「二世実」とする。

## 一 今回デジタル化した写真乾板一覧

今年度デジタル化した写真乾板を「フォルダ3」と「4」にまとめ、以下それぞれに各データNoと曲名を挙げた。現時点で、写真乾板の画像と初世実が著した『梅若実日記』(注3。以下『日記』と略称。個々に注は付けず、記述年月日を示す。一部の役柄などは飯塚が適時カッコ付けで補った。)や雑誌「能楽」等に載る梅若家

の厩橋舞台での能楽番組との照合は一部に止まっており、どの写真が何時・何の演目を写したのかについては継続的課題とせざるを得ない。このため、本論でのデータ曲名は各写真乾板の予想される曲名とした。曲名の限定が難しいものについては「出立」の名称を挙げた。

### フォルダ3

- 03-002 「靱猿」 左から猿曳・太郎冠者・大名
- 03-003 三番叟(鈴之段)
- 03-004 「石橋」・大獅子(または師資十二段之式) 左ツレ 赤獅子 右シテ 白獅子
- 03-005 「石橋」・大獅子(または師資十二段之式) ツレ赤獅子
- 03-006 「千手」 左シテ千手 右ツレ重衡(万三郎)
- 03-007 「羽衣」・和合之舞 シテ物着後
- 03-008 左側 着流尉出立。右側 着流僧出立。
- 03-009 「屋島」 左側 前シテ 右側 前ツレ
- 03-010 「放下僧」 左側 前ツレ 右側 前シテ(二世実)
- 03-011 「放下僧」 左側 後ツレ 右側 後シテ(二世実)
- 03-012 「通小町」 シテ
- 03-014 「砧」 シテ
- 03-015 独吟(二世実)
- 03-016 「小袖曽我」 シテ(万三郎)
- 03-017 「小袖曽我」 ツレ(二世実)

03-018 「通小町」シテ  
03-020 「砧」シテ  
03-021 掛素袍大口出立  
03-022 「楠露」 左側 シテ(紅雪) 中 子方  
(美雄) 右側 ツレ  
03-023 「小督」シテ(二世実)  
03-024 「融」前シテ  
03-025 「融」前シテ  
03-026 「頼政」後シテ  
03-027 「草子洗小町」右 子方(美雄)  
03-028 「鶴亀」シテ(万三郎)  
03-029 「田村」前シテ  
03-030 「雲雀山」左側 ワキ 右側 子方  
03-031 「翁」翁  
03-032 「素袍落」左側 太郎冠者 右側  
主人  
03-033 独吟(二世実か?)  
03-035 「薩摩守」奥 船頭 手前 出家  
03-036 「鞍馬天狗」花見  
03-037 子方(美雄?)  
03-039 独吟(華雪)  
03-040 「翁」翁  
03-041 「橋弁慶」(袴能または仕舞)左側 シ  
テ(万三郎) 右側 子方  
03-042 「橋弁慶」(袴能または仕舞)左側 シ  
テ(万三郎) 右側 子方  
03-044 「安宅」(延年之舞?)  
03-045 「屋島」左側 ツレ 右側 前シテ  
03-046 「文相撲」左 相撲取 中 大名 右  
側 太郎冠者  
03-047 「金岡」左側 夫 右側 妻  
03-048 「縄綱」左側 主人 右側 太郎冠者  
03-049 「安宅」?子方  
03-050 「羽衣」・和合之舞 シテ物着後

#### フォルダ 4

04-001 「正尊」?前シテ(二世実)  
04-002 長絹大口女出立。「東北」、「夕顔」、  
「野宮」、「定家」等のシテ。  
04-003 「翁」千歳(二世実)  
04-004 「望月」子方  
04-005 「鶴亀」シテ(観世清廉)  
04-007 初冠狩衣指貫込大口出立「融」・舞劔?  
シテ  
04-008 「安宅」?シテ 03-049 「安宅」?子方  
と同時に撮影と思われる。  
04-009 子方  
04-011 「清経」左側 シテ 右側 ツレ  
04-014 「頼政」後シテ  
04-015 「班女」左側 前シテ 右側 間狂  
言  
04-017 「翁」翁  
04-019 独吟(万三郎)  
04-022 「野守」仕舞(万三郎)  
04-023 独吟(万三郎)  
04-024 独吟(万三郎)  
04-025 独吟(万三郎)  
04-026 「橋弁慶」(袴能または仕舞)左側 シ  
テ(万三郎) 右 子方  
04-027 「正尊」左側 後シテ 右側 後ツレ  
04-028 「松虫」シテ(万三郎)  
04-029 「棒縛」左側 太郎冠者 中 主人  
右側 次郎冠者  
04-030 独吟(万三郎)  
04-032 不明(左側 シテ?唐織脱下女出立  
中唐織着流女出立 右 着流僧出立)  
04-033 「屋島」?仕舞(万三郎)  
04-034 「葛城」?「吉野天人」?  
04-035 「正尊」左側 ツレ 右側 シテ(二  
世実?)

- 04-036 「忠度」 仕舞（華雪）
- 04-037 「高砂」？ 「杜若」？ 舞囃子（華雪）
- 04-038 狂言不明
- 04-039 「翁」 千歳（二世実）
- 04-041 「大会」
- 04-043 「屋島」 袴能（万三郎）
- 04-045 初世実
- 04-047 「屋島」？ 仕舞（初世実）
- 04-050 独吟（初世実）

## 二 「万三郎先生の思ヒ出ノあるばむ」に載る写真との比較

梅若研能会の八田達弥師より、「橘香」(第一次)第4号掲載の「万三郎先生の思ヒ出ノあるばむ」(注4。以下「あるばむ」と略称。注は付けないが、引用部分の頁は個々に示す。)のコピーを頂いた。「あるばむ」本文では、掲載写真に関して被写体である万三郎が撮影経緯を述べており、この点でも貴重な資料である。以下引用すると「私のところには古い写真帳が一組ありますこれは私の若い頃、明治三十七八年頃から、岩崎輝弥様が写して下さった写真を保存したものであります。何分にも明治三十七八年頃と申しますと、素人写真などといふものはない頃ですし、まして舞台で写真を撮るといふ事もなかつたやうです。岩崎様が能の写真を撮つて下さるといふので、舞台裏に板敷を設け、幕を張りまして毎月の例会毎に撮影していたものであります。恰度この写真を撮つて頂いた頃が、私のチプスで生死の境をさ迷った明治三十八年の前後からなので、私にとっては特に思ひ出の深いものであります。」(12頁)とあり、三菱財閥家の岩崎輝弥の依頼で例会の度に撮影されたと述べている。しかし岩崎輝弥は明治38年前後に

はまだ中学生である。これらの写真乾板の撮影依頼者については以前『日記』との比較から、数枚の写真は岩崎弥之助の依頼で明治37年9月7日に撮影の機会を設けて撮られたと考えられることを述べた(注1)。輝弥が写真に興味を持っていたので、父の弥之助が手配して輝弥立合いの下に撮影させたと考えるのが自然であるが本人が撮った可能性も否定できない。

また「あるばむ」に掲載された写真とデジタル化した写真乾板を比較したところ、同時期に撮影されたか、同一写真であると考えられる組み合わせをいくつか発見した。以下に「あるばむ」の写真と、関係していると考えられるデジタル化した写真乾板データを挙げる。写真乾板データの内容を示すフォルダ3、4の説明は前章に、その前にデジタル化したフォルダ1、2の説明はすでに拙稿(注1。ただしDVD1がフォルダ1、DVD2がフォルダ2である。)にあるので、写真乾板データはそのデータNoのみを挙げる。

まず「あるばむ」9頁の「この鶴亀は明治三十九年一月二十一日のものでして、前年の七月三十日発病以来約半歳三度も絶望を傳へられたのが、皆様の御厚意亡父をはじめ、家人の心づくしに、再び生き甦り、舞台に立てたその日の深い思ひ出は今日もまだ私には生々しいものがあります。」(12頁)という「鶴亀」の写真であるが、これは『日記』の明治39年1月21日に「鶴亀 実少シ不快ニ付万三郎病後初テ出勤」とあり、日付が確定できる。この写真は03-028と同一と考えられる。

「あるばむ」10頁の「海士」の写真は01-027と同一と考えられる。「あるばむ」11頁の「仲光」の写真は02-011と同一か、同じ時に同じ

構図で撮影した写真と思われる。「海士」と「仲光」の写真についての「あるばむ」の本文を引用すると、「病気話のありましたついでに、長男美雄の事です、あれもチブスでたうとう亡なつてしまひました。次の海士の写真は、私の病気全快後ですがあの子の九ツ、明治三十九年（飯塚注：この能は『日記』明治39年10月21日付にある「宅別会能」の「海人赤頭三段舞 万三郎 子方美雄」である可能性が高い。）の写真です。仲光も同じ年の写真かと思ひますが、これは、美女が美雄で、幸壽が観世茂と申した、今の西町の織雄さん（飯塚注：七世観世鏡之丞雅雪）です。かう眺めて参りますと、また色々と思ひ出されて参ります。美雄の死んだのは、大正六年十二月二十二日、恰度二十歳であつたのです。」（12頁）とある。

「仲光」の写真は拙稿（注2）で「また明治三十九年五月二十日の『日記』には『宅催別会能』でシテ二世実の《小督替装束》・シテ鉄之丞の《朝長》・シテ二世実の《草紙洗》・シテ万三郎の《仲光》が演じられたことが載っているが、（中略）《仲光》（シテは初世万三郎。この時の撮影ならば左の美女御前が梅若美雄、右の幸寿丸が繁（飯塚注：茂）である）である。なお、明治三十九年五月十九日の『日記』には『一写真師小川真一（原文ママ。小川一真の誤りか）ヲ連岩崎輝弥被参る。』とある。おそらく撮影の打ち合わせだろうが、あるいは別会能の前日に面・装束を出し、試着して撮影したのかも知れない。」と述べたが、「あるばむ」に「仲光も同じ年（飯塚注：明治39年）の写真かと思ひますが」（12頁）とあるので、やはり「仲光」の写真はこの時、明治39年5月20日梅若宅別会能の撮影である可能性が高い。

また撮影された期日が確実であるものに

「あるばむ」14頁の「通小町 シテ先代観世鏡之丞師 ツレ万三郎師」の写真がある。この写真と同じ装束の「通小町」の写真乾板が1-032、1-033、3-012、3-018であり、これらは「あるばむ」の写真とポーズは異なるものの同じ時に撮影された可能性が強いと考えられる。「あるばむ」には「次は通小町です。これは大正八年の写真でして、おシテは先代の鏡之丞さんです。ツレが私なのです。（中略）この時の通小町は雨夜之傳の小書がつきまして、これが鏡之丞さんの最後のお舞台になつたのです。舞台にゐられるうちに、もうフラついてゐられたさうですが、偉いものでたうとう舞ひ終へられて、幕に入られる時には後見に出て居りました六郎が腰を抑へてお引かせしたのです。これが最後で、これ以後はもう舞台へは出られませんでした。」（12頁）とある。「大正八年」とあるがこれはおそらく万三郎の記憶違いで、この時の「先代の鏡之丞さん」は五世観世鏡之丞紅雪であるはずだが、彼は明治44年3月31日に亡くなっている。この「通小町」について、『観世華雪芸談』（注5。以下『華雪』と略称。注は付けず、引用部分の頁を個々に示す。）には「父の最後の能は明治三十九年で、丁度私は入隊中の時のことでした。父にはもともと中気の気味があつて何となく身体がだるいといつていたのですが、この時、梅若の舞台で『通小町』の雨夜ノ伝を万三郎兄のツレで舞つていました。その最中『我が袂』というあたりでフラツとしたが、そのまま最後まで舞いつづけ、幕にはいる時後見の六郎兄（実）が腰を抑えて引いたそうです。」（22頁）とある。明治39年10月21日の『日記』にも、前述の「海士」と同じ「宅別会能」に「通小町雨夜之伝 鉄之丞 連 万三郎 信三」とあり、この催しの時に



紅雪が病気になったことについて「○鉄之丞事通小町の切より少し病気ニ相成。六郎事鉄之丞の手ヲ取りて幕へ引。帰宅後存外ニ快気のよし。」と記されているので、「あるばむ」14頁および1-032、1-033、3-012、3-018の「通小町」は明治39年10月21日の梅若宅別会能を撮ったものと確定できる。

「あるばむ」15頁の「小袖曾我」は03-016と装束の柄と撮影向きが同じことから、同一写真か同じ時の撮影と考えられる。なお01-013は、03-016、03-017と装束の柄・撮影向きが同じなので01-013を真ん中から半分に切って03-016と03-017を作成した、あるいは逆に二枚を合成して01-013を作成したことが考えられる。なお「あるばむ」本文では「次の小袖曾我は明治三十七年、即ち大病以前の写真かと思ひますが、弟の六郎との時の写真でございます」(12頁)と明治37年の写真としている。しかし、01-013は『亀堂閑話』口絵(注6)に「『小袖曾我』シテ万三郎先生 ツレ六郎先生(明治三十六年)」として載る写真と同一と考えられ(注1)、明治36年5月17日付の『日記』にも「宅別会能」としてシテ万三郎・ツレ二世実の「小袖曾我」の記録があるのに対し、明治37年の『日記』にこの組み合わせの「小袖曾我」の記事が見つからないので、この写真は明治36年5月17日撮影の可能性が高いと思われる。

「あるばむ」18頁左側の「羽衣」の写真は、「さて最後の装束写真は羽衣ですが、これは岩崎様で衝立をお造りになるのに、特にお撮りになつたもので、この写真から、刺繍で衝立をお造りになつた記念の写真なのであります。たしか今も岩崎様にはその衝立がある事だと存じます。大変御立派なものでありました。」

(13頁)とある。これと同じ柄の装束・同じ鳳凰の立物なのが02-044と03-007である。これらの写真が撮られた日時については現在時点では分らないが、明治30年代であることはほぼ確実だろう。

「あるばむ」18頁右側の袴を付けた万三郎の独吟姿は04-025と、19頁の万三郎の紋付の独吟姿は04-030と同一か、もしくは同じ時に連続して撮影したものと考えてよいだろう。

### 三 『観世華雪芸談』に載る写真との比較

観世鉄之丞家六世である観世華雪は幼名を織雄と言い、初世実の娘と結婚している。『華雪』にも、デジタル化した写真乾板(データNoのみを挙げる)と同一と考えられる写真が載っているので、以下紹介する。

まず『華雪』4頁の「先代 梅若実」の写真は04-045をトリミングしたものか同時に連続して撮影された写真と思われる。04-050もこの撮影時、向きを変えて正面から連続して撮影した写真と考えて良いだろう。『華雪』6頁の「厩橋の舞台」の写真は01-012、もしくはこれと同時に連続して撮影されたものと思われる。『華雪』13頁の「青年時代の華雪」の写真は03-039と同一と思われる。これと比較すると、髪型が二世実と共通しているため決定には至らないが03-033、04-036、04-037も青年時代の華雪の写真である可能性がある。『華雪』18頁の「鞍馬天狗 観世紅雪」の写真は01-001と同一である。『華雪』38頁の「壮年時代の先代梅若万三郎」の写真は『亀堂閑話』口絵にも「万三郎先生舞台姿(二十六歳)」(注6)として載っているが、04-024と同一と思われる。この写真が明治30年代後半に撮られている事を考えると、『亀堂閑話』が「二十六歳」とする

のは「三十六歳」の誤りではないかと思われる。『華雪』にはこれら5枚の写真とも「写真を拝借した方々 梅若万三郎氏」(320頁)と載るので、その原本がここで取り上げた写真乾板である可能性は高いと考えられる。

#### 四 調査した写真乾板と同時に撮られたと考えられる写真

二章で触れたが、「あるばむ」14頁の「通小町」の写真と1-032、1-033、3-012、3-018は、シテ・ツレとも同じ装束で同じ時に撮られたと考えられるものの構図は異なる。同様に「あるばむ」18頁の「羽衣」の写真と02-044、03-007も同じ装束・冠であるが、構図は異なる。これらのことから、すでに失われてしまったか、もしくはまだ未発見の写真乾板が存在する可能性が考えられる。例えば「あるばむ」16頁の「道成寺 万三郎師」の写真は、これまで調査した写真乾板にはないが、「あるばむ」本文に「道成寺は十五六回しか舞つて居りませんが、何分、二十二歳(明治二十二年)で披きましてから六十歳を越してからも三度、この写真のは一番調子のつた三十七八の頃かと思ひます。」(12頁)とあるので、明治30年代後半の写真と考えられ、写真乾板があってもおかしくない。また『亀堂閑話』口絵の「万三郎先生の仕舞『清経』(三十六歳)」(注6)も、04-019と04-022が同じ装束であることから同じ時に撮影された写真と思われるものの、この写真の乾板は未見である。これら一連の能楽乾板写真は、今後まだ発見される可能性があるだろう。

#### おわりに

一昨年から昨年に渡り梅若万三郎師の御協力のもと調査させて頂いた明治30年代の写真乾板について、これまでにデジタル化したデータを報告した。前述したように『日記』等の同時代資料との照合は今後の課題であり、分かった事柄についてはこれからもその都度発表する予定である。これらの写真乾板は、明治30年代の梅若家における、岩崎弥之助ら財閥の能楽愛好と万三郎家・二世実家や姻戚の鏡之丞家の子弟の役者としての成長を伝える貴重な資料である。今後も戦前の梅若万三郎家所蔵資料を調査させて頂きたいと思っている。

#### 注

- 1 「梅若万三郎家所蔵写真乾板のデジタル化について」 拙稿「椋山人間学研究」第7号 椋山人間学研究センター 平成24年3月発行 139～147頁
- 2 「明治三十年代後半梅若家の繁栄―梅若万三郎家所蔵写真乾板から―」 拙稿「橘香」第57巻第9号 梅若研究会 平成24年9月発行 18～19頁
- 3 『梅若実日記』 梅若実著 梅若六郎・鳥越文蔵監修 梅若実日記刊行会編 八木書店 第6巻(明治30年～35年) 平成15年5月発行 第7巻(明治36年～41年) 平成15年12月発行
- 4 「万三郎先生の思ひ出ノあるばむ」「橘香」(第一次)第4号 橘香発行所 昭和15年9月発行 9～20頁
- 5 『観世華雪芸談』 沼艸雨編著 檜書店 昭和35年3月発行
- 6 『能楽随想亀堂閑話』(復刊) 十二世梅

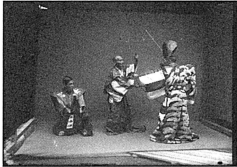
若万三郎著 玉川大学出版部 平成9年  
5月発行 口絵写真

### 補記

貴重な乾板写真を提供・デジタル化させて頂いた梅若万三郎師、仲介の労を取って下さった梅若研能会八田達弥師に心より感謝いた

します。また八田師には乾板写真の曲名等もご教示頂きました。記して感謝申し上げます。  
本稿は平成24年度科学研究費基盤研究C「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化」研究代表者 飯塚恵理人(課題番号 23520256)による成果の一部となります。

### フォルダ3



03-002



03-003



03-004



03-005



03-006



03-007



03-008



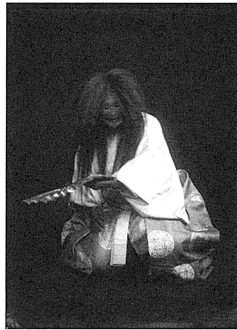
03-009



03-010



03-011



03-012



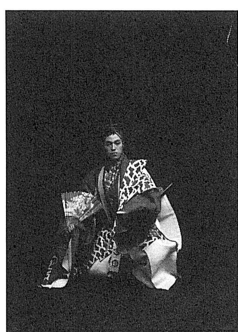
03-014



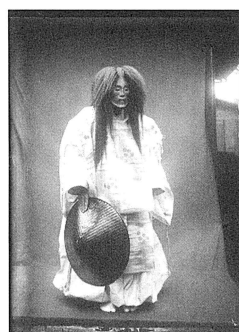
03-015



03-016



03-017



03-018



03-020



03-021



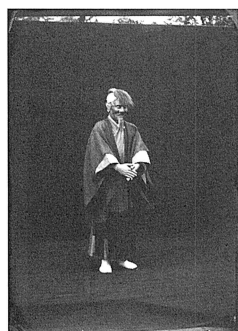
03-022



03-023



03-024



03-025



03-026



03-027



03-028



03-029



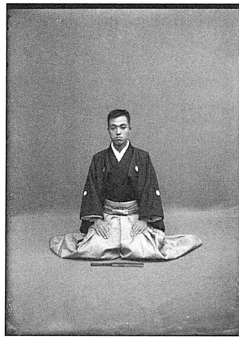
03-030



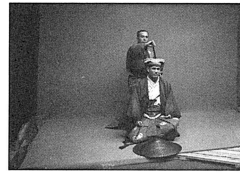
03-031



03-032



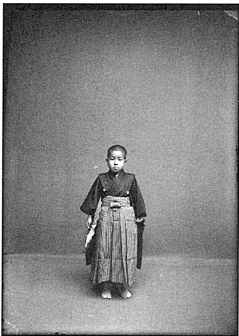
03-033



03-035



03-036



03-037



03-039



03-040



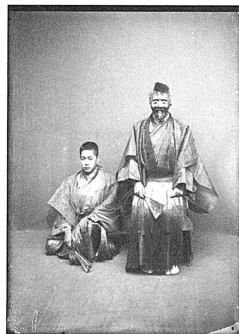
03-041



03-042



03-044



03-045



03-046



03-047



03-048



03-049



03-050



フォルダ 4



04-001



04-002



04-003



04-004



04-005



04-007



04-008



04-009



04-011



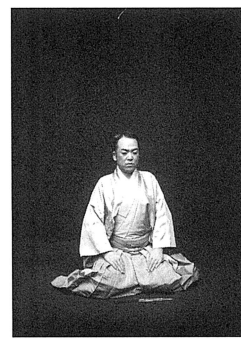
04-014



04-015



04-017



04-019



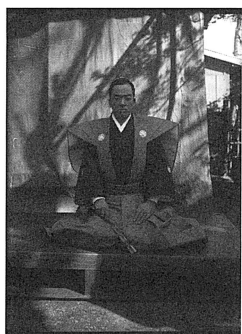
04-022



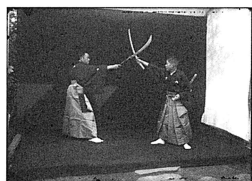
04-023



04-024



04-025



04-026



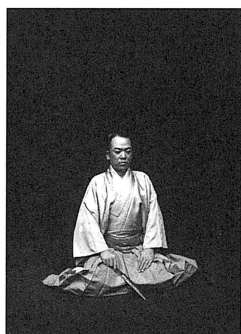
04-027



04-028



04-029



04-030



04-032



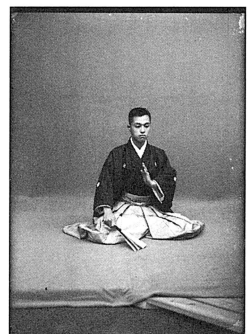
04-033



04-034



04-035



04-036



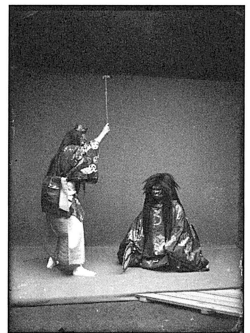
04-037



04-038



04-039



04-041



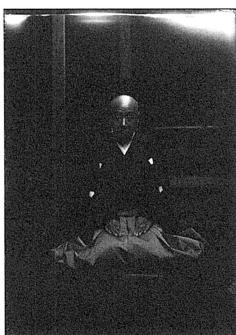
04-043



04-045



04-047



04-050